

## エジプトの「銭湯」で裸の付き合い



金子 淳

風呂が好きだ。だが、カイロの自宅には湯船がない。なんとかして熱いお湯につかりたい。常々そう思っていたところ、近くに地元住民が愛する「銭湯」があると聞き、さっそく行ってみることにした。

ナイル川沿いの庶民街ブーラーク。路地裏で出会った9歳の少年に道を尋ねると、誇らしげに案内してくれた。訪れたのは「ハンマーム・オーカル」。アラビア語で「オーカルさんの銭湯」というような意味だ。従業員のラマダンさんによると、もともとオスマン帝国時代に建てられた歴史ある銭湯で、いまはオーカル氏が買い取って運営している。「数百年の歴史があり、有名なんだ。1日に何百人もお客さんが来る」という。

この銭湯では、男女は時間で入れ替わる。午後5時から男性のはずだったが、2時間ほど待たされた。それでも、風呂への執念は揺らがない。いくらでも待てる。入り口で「プラン」を決めて料金を支払うのが通例で、私は湯船と水風呂、スチームサウナ、アカス

リを選択して200<sup>ドォ</sup>（約600円）を支払った。中は広々としており、白い大理石で湯船やアカスリの施術台がしつらえてある。お湯も透明で清潔だ。

日本の銭湯と異なる点はいくつもある。まず、水着に着替えなければならぬ。他のお客たちと一緒にぞろぞろと中に入り、従業員の指示に従って一斉にサウナや水風呂を行ったり来たりする。やがて準備が整うと、順番にアカスリなどの施術を受ける。

それでも、裸の付き合いが妙な連帯感を生み出すのは、エジプトでも変わらない。狭いサウナで10人ほどが肩を寄せ合い、初めて会う人同士でも世間話で盛り上がる。ほとんどアラビア語が分からない私にもしきりに「コワイエス?（いいだろ?）」と話しかけてくれたし、水風呂ではおじいさんがぶきけて冷たい水を浴びせてきて大笑いした。湯船につかって「ああーっ」と嘆息を漏らし、目を閉じて上を向くのも、人類みな共通だ。

中東は日本から遠く、多くの日本人にとっては異質な世界かもしれない。だが、風呂を楽しむ気持ちは同じだ。銭湯に通えば、少しずつ理解が深まることもあるかもしれない。風呂上がり、雑貨屋で買った冷たい牛乳を飲みながら、そんなことを考えた。